

裏方として ミャンマーの発展を支えたい



JICAミャンマー事務所
佐藤恭之
SATO Yasuyuki

大学院卒業後、2005年にJICAに就職。中東・欧州部、農村開発部を経て、2010年6月から現職。

この3年、激動のミャンマーの姿を目の当たりにしてきたJICA Aミャンマー事務所の佐藤恭之さん。現地の人々の真のニーズをくんだ開発を進められるよう、この国の発展を縁の下で支えている。

人生を変えた 子どもたちの笑顔

初めて海外に行ったのは、大学1年生の時。友人に誘われて参加したスタディーツアーで、フィリピンのネグロス島を訪れました。子どもたちと植林をしたり、日本文化を紹介したりと楽しい時間を過ごしたのですが、地元で産業がないため、親たちは出稼ぎに行っているの聞いて驚きました。

村を去る時、子どもたちが手を振りながら見送ってくれる姿を見て、なぜか号泣してしまいました。自分は数日間だけ過ごして日本に帰るけれど、これからもここで生きていく彼らには、どんな未来が待っているのだろうか…。そう思ったなら涙が止まらなかったのです。これをきっかけに、開発途上国の農村の人々の暮らしを豊かにする仕事に携わりたいと思うようになりました。

長期的な視点を持つ 大切さ

これまでの業務で特に印象的だったのは、農村開発部で担当したモンゴルの案件。鉱山開発などによる環境破壊を解決するため、生態系保全の研究と環境教育の拠点となるセンターを造ることに。しかし、当時のモンゴルではこれらの取り組みは遅れ、ほとんど浸透していませんでした。そのため、自然環境

省の担当者も、どのような施設にすべきかを検討するのに苦労していて、無理難題を持ち掛けてきました。「絶滅危惧種の川魚を展示する水槽をもっと大きくしたい」と言われた時には驚きました。技術的にも予算的にもとても現実的ではなかったからです。

日本が建設を支援しても、完成後に施設を運営していくのはモンゴルの人たち。だからこそ、「予算内で運営できるか」「十分な管理体制を確保できるか」と粘り強く話し合い、なんとか適切な規模で合意できました。目の先のことだけでなく、将来を見越した計画づくりの大切さを実感しました。

ミャンマーのすべての人に 支援を届ける

その後、ミャンマー事務所に配属されてもうすぐ3年。その間に民主化が進み、街を走る車の数が目に見えて増えたり、報道の自由が確保されて新しい新聞が発刊されたりと、次々と変化が起ころっています。

そして今、新しい動きとして、長年対立してきた少数民族の武装勢力とミャンマー政府が、和平合意に向けて交渉を続けています。日本も現地政府や武装勢力、そして一般人々のニーズを集め、カレン州とモン州の開発計画をつくる調査を始めました。

私は裏方として、その調査がスムーズに進むようにサポートしています。例えば、武装

勢力の影響が強い地域へ調査に行くには移動許可が必要。国境省に申請するのですが、担当者が出張などで不在なら手続きがストップすることも。許可一つ取るにも、何週間もかかります。

ですから、普段からできるだけ顔を合わせて信頼関係を築き、いざという時に効率的に手続きが進むように心掛けています。

また、タイ国境近くの地域の状況を把握する調査に同行した時には、ミャンマー政府の担当者から武装勢力と衝突が始まるかもしれないと連絡を受け、急ぎよ引き返したこともありました。これは、ミャンマー側に調査団のスケジュールを伝えていたからできたこと。彼らが安全に動けるよう、関係者に情報共有するなど気を配るのも私の仕事です。

ミャンマーならではの大変さはありませんが、新たな国づくりに向かって歩みを進める勢いある国。今後も武装勢力と政府の和平交渉の動きを慎重に見極めながら、人々のニーズをくんだ開発に取り組んでいきます。



少数民族が暮らす地域で、適切な給水方法を探る



ミャンマーでラカイン族が多く暮らす地域を訪れ、生活向上のためどのようなニーズが必要とされているのかヒアリングする佐藤さん(左手前から四人目)